

# アドボカシー活動 国際大会参加報告



結核研究所  
研究部長兼対策支援部長  
加藤 誠也

結核予防会ではアメリカにおけるアドボカシー活動の調査のために、本年3月世界結核デーシンポジウム（本誌303号で報告）を共催したRESULTSの国際会議に参加した。参加者は本部から喜多村専務理事、山下事業部長、結核研究所から国際協力部小原研究員と筆者であった。

## ○ アドボカシー(Advocacy)とは

アドボカシーとは一般になじみが薄い言葉であるが、国や地方自治体の政策と支出に影響を与え、社会に変化を引き起こすために鍵となる後援者の支援を得て、政策決定者に影響を与えようとするものである。結核研究所の森は「戦略的普及啓発活動」と訳している。問題を評価・分析し、その解決策を見だし、それをメッセージにまとめ、メディアやコミュニティを通じて一般に広報し、また、直接政治家や政策決定者に働きかける。これらの活動資金のために募金活動も必要になる。RESULTSはアメリカ国内外の貧困対策、教育などのアドボカシー活動を行ってきた草の根のNGOで、近年は感染症対策、特に結核対策にも力を入れている。

## ○ 大会の概要

本大会は毎年開催されているが、今年はRESULTS創立25周年の記念大会であった。アメリカ国内に加えて、オーストラリア、ドイツ、メキシコ、カナダ支部からスタッフとボランティア活動を行っている会員230人が参加した。大会の運営には多くの会員がボランティアとして関わっていた。出席者は女性の方が多く、男性は退職後と思われる年代の人が多かった。

1日目は本大会に先立ち、リーダーとして活動に必要な基礎的な研修があった。参加者はグループ形成の方法、リーダーシップを発揮する方法、聴衆やコミュニティを鼓舞するために必要な力強い話し方、運動に必要なコミュニティ分析などから、2つのテーマを選ぶことができた。

2日目の午前の開会式ではアメリカ各州の支部、国外の支部ごとに、参加者が壇上に上り、お国自慢やこれまでの成果などを披露した。日本からはRESULTS日本支部のメンバーと結核予防会が世界結核デーに開催したシンポジウムの様子のパネルを提示した。

基調講演では会長(Executive Director)のバーバラ・ウォレス女史が25年の歴史と成果を振り返った。RESULTSの創設者であり、マイクロクレジット(途上国における貧困対策である起業家に対する無担保・低利の融資)について提唱者であるサム・ダレーハリス氏を称えて壇上に迎え、サム氏からのメッセージに参加者は熱狂的な賞賛を送った。

引き続き、前回の大統領選挙でハワード・ディーン候補の選挙参謀であったジョー・トリッピ氏がインターネットを使った選挙活動をテーマに講演を行った。

午後には国内問題と国際問題に分かれて、それぞれの貧困、教育、結核やエイズなどの保健医療問題の現状に関する講演があった。募金活動の考え方と実際のセッションでは、「募金は世界の資源を博愛の実現に向け直すための崇高な実践活動である」というメッセージが繰り返し使われていたのが印象的であった。

午後のセッションの最後に各国支部の活動状況の紹介があった。日本支部は結核予防会と共催で世界結核デーにウィンストン・ズル氏を招いてシンポジウムを開催したことを報告した。また、日本がGFATM(世界エイズ・結核・マラリア対策基金)への拠出金を倍増させ当面5億ドルの拠出を行うことを決め、新たなODA政策として保健と開発に50億ドルの協力を行うことが報告されると、参加者から拍手喝采が起こった。夕食後、25周年記念式典が開催された。ここでも、創立者のサム・ダレーハリス氏を称える演出と見事なスピーチが続いた。

3日目は再び、国内、国際に分かれて、それぞれ、キャンペーンの背景とロビー活動のための予算と

要望内容の説明があった。これは、予算額を含めた非常に具体的な内容であった。ロビー活動のワークショップは、参加者の経験によって分かれたが、筆者が参加した初心者コースでは議員秘書が議員と面会する実際的な方法について講演と質疑応答があった。アドボカシーの実践的な技法に関するワークショップは7つのテーマがあったが、メディア対応に関する研修では、BBCで記者の経歴がある講師が、メッセージのあり方やインタビューの対応などについて講演した。ブリアン・バイアド下院議員（民主党）からのメッセージでは、ブッシュ大統領の物まねで会場を爆笑の渦に巻き込みながら、訴えるべきところでは参加者が起立して拍手（standing ovation）をした。

私たちは3日目を終了して帰国したが、4日目にはアメリカの参加者はそれぞれの選挙区の国会議員に対するロビー活動を行い、国際支部の参加者は世界銀行に陳情活動を行った。

## ○ 大会の特色

本大会のプログラムは、活動を行うために必要な基本的な考え方や技法から、具体的で実践的な内容まで網羅する内容を含んでおり、出席者の大会へ積極的な参加を促し、これまでの活動成果が実感できるように構成されていた。講師のみならず、出席者の発言についても、共感できるものにはstanding ovationが随所で寄せられたのが、印象的であった。

インターネットを使った選挙活動を成功させたジョ・トリッピ氏の講演で、興味深い話があった。アメリカ人は自分たちの力で何かを変えたいと思っており、キャンペーンのメッセージ「あなたも政治を変えられる」は伝染して、多くの人が目覚めた。人々はWeb siteに行き、アメリカの将来を語り合った。インターネットがそのような人達

のコミュニティを作る役割をしたことがキャンペーン成功の要因であった。

RESULTSの成功の背景として、このような「自分たちで何かを変えたい」という考えを持った会員が集い、それぞれの会員が心に抱いている国内・国際の貧困対策、教育、保健医療などの問題に対して明確な目標を掲げ、会員の活動によって、変化を実現してきた実績をみんなで喜びあい、称え合う大会の運営があるものと思われた。

## ○ 今後に向けて

1980年代にアメリカで結核の罹患率が上昇した原因の一つに結核に関する関心が低下し、対策予算が縮小したことが挙げられている。わが国においても、一般の人のみならず医療関係者においても結核に関する関心の低下は著しく、今後、同様なことが起こる懸念がある。結核予防会はこれまで複十字シールキャンペーン、結核予防週間、結核予防婦人団体の組織化などを通して、主に一般の人を対象に結核対策の重要性を訴えてきたが、今後の結核対策推進のためには、政策や予算を目標とするアドボカシー活動は重要な要素になるものと考えられる。今回の法改正によって都道府県は予防計画を策定し、それぞれの地域特性に応じた対策を進める方向となったことを考えると、都道府県レベルにおけるアドボカシー活動も課題になってくる可能性がある。

今回の視察ではアメリカの文化・社会の中で成果を上げているRESULTSの活動をみてきたが、日本における政策決定プロセス、社会文化的な背景に応じたアドボカシー活動のあり方は異なっているものと考えられ、その中で結核予防会本部・支部及び結核予防婦人団体が担う役割があるものと思われた。



トナカイのお面で  
自己紹介するアラスカ支部